

## 「シークレット・ライフ・オブ・パスワード」

イアン・ウルビナ (ニューヨークタイムズ)

翻訳： Andrew Upton、石川拓己、野口萌、土肥野秀尚、松本佳吾、佐藤萌

世界で最も有力な金融サービスの一つ、カンターフィッツジェラルド証券の CEO であるワード・ラトニック氏はあの日のことを語り始めると今でも涙を流す。2機の航空機が世界貿易センターに激突し、友人、実の弟を含めた従業員 658 人が命を奪われて間もなく、まず彼の頭に浮かんだのはパスワードのことだった。これは冷淡に思えるかもしれないが、実はそうではない。

その日、誰もがその出来事に巻き込まれたように、息子のカイルを幼稚園の入園式に連れて行くために午前中休みをとっていたラトニック氏は激しいショックを受けた。

しかし、彼は会社の命運がかかった人間のひとりだった。

会社の存続への脅威は事件発生の直後に明らかになった。

証券市場が再び開くとき、オンラインに戻すために必要な何百ものアカウントやファイルのパスワードは誰も分からない。周りにいる 4 人にパスワードを教えるなどという要件を含んだ包括的な偶発事故対策を実施していたものの、ニューヨーク本社での 960 人の従業員の大多数はもう既に命を落とした後だった。「大火事を想像して実施したものでした」とラトニック氏は言った。「4から6区全体が破壊されるなんて、当時は全く予期せぬ実態でした。」当日まで安全な距離と判断した世界貿易センター第二棟の直下に設置されたバックアップサーバーも攻撃によって壊されてしまった。

事件の数時間後、Microsoft は 30 人以上の機密保護専門家を現場からおおよそ 30 キロメートル離れたロッチェルパークニュージャージー州で立ち上げられた緊急の指令センターに派遣した。パスワードの多くは、会社の IT 部門が従業員に使用を強く要請していた “JHx6fT!9” のような文字と数字の複雑な組み合わせで比較的安全だった。そのパスワードを解読するため Microsoft の機密保護専門家は「a」から「ZZZZZZ」に至るまでのすべての文字と数字の組み合わせを順番に試す高速コンピュータを使い、力づくという解読方法を実行した。しかし、高速コンピュータや力づくの方法を使っても、組み合わせは一兆もあり、解読するには数日がかかる。ウォールストリートは待っていらなかった。

Microsoft の技術者は、多くの人は複数のアカウントに同じパスワードを使うこと、そして

このパスワードは大体独自・個人的な物であるということの二つを利用する必要があるとわかっていた。

アルゴリズムをうまく利用するために、失われたパスワードの持ち主に関する膨大な情報を集める必要があった。そのパスワードは企業にとってあまりに具体的で、個別で、独自のものであった。「人間はそうした細かな情報によって個別化される。それこそが個人を作り出すものなのだ。」

気がつくともラトニック氏は電話をかけることに没頭していた。彼は自分の苦悩を抑えながら、亡くなった同僚の配偶者、両親、兄弟に励ましの電話をかけた。そこでさりげなく彼らが愛する人々のパスワードを知っているかどうかも尋ねた。

だいたいの場合、彼らは愛した人々のパスワードを知らなかった。それはつまり、ラトニック氏が Microsoft の技術者が用意したチェックリストに従い、順に聞き取りをはじめなくてはならないということだった。

「結婚記念日はいつですか。出身大学はどちらですか。犬を飼っていますよね、お名前はなんですか。二人のお子さんのお誕生日を教えてくださいませんか。」

「これはツインタワーが崩壊してから、まだ24時間も経っていない時の出来事でした。」とラトニック氏は言った。「消防局はまだ“救助活動”と呼んでいた。」そのため、遺族はまだ家族を失ったことを受け入れることができなかった。ラトニック氏は誰かが亡くなったとは決して言わなかった。ただ“行方不明”なだけだと。彼はその人々が会社にとって重要だと断言するように質問をしていた。その会話は突然泣き叫ぶ声と息苦しい沈黙の繰り返しだった。

「悲惨だった。」彼は言った。チェックリストを終えるまでには1時間以上かかるときもあったが、ラトニック氏は先に電話を切らないと決めていた。

そのおかげで、カンターフィッツジェラルド証券は2日以内に営業を再開することができた。彼らのパスワードをセキュリティ上弱くさせた人間的感傷こそが最終的には会社を救う鍵となった。

数年前に、私は友達や家族にパスワードを覚えてくれるように頼むことをはじめた。この短い個別の暗号が誤解をもたれていると信じるようになった。記憶しておくことの負担、それをずっと更新し続ける面倒、日常生活におけるパスワードの圧倒的な数というように、なぜ一般にパスワードは軽蔑されているのか私は理解している。私もそれが嫌いだ。しか

し、パスワードにはその面倒さ以上のものがある。パスワードを作ることにおいて、実際私達はそれを忘れないように作り、それらは秘密の生活という性質を帯びるようになる。

多くのパスワードは哀愁や遊び心、詩情などに満たされ、中でも鮮やかな裏話を持つものが多い。やる気を出させる言葉、上司の悪口、なくなった恋人への心に秘めた思い出、内輪ネタ、心の傷などが我らの精神生活を表す象徴のようなもので、「記念品」パスワードと名付けたのだ。聖句、星占い、あだ名、歌詞、本の一節など、あらゆるものから由来し、人目につかないところにいれたタトゥーのように、そのパスワードは親密さで詰まっています、表現に富む傾向を持つ。

一番の驚きだったことは、人々が気さくに、それどころか熱心にこの所謂「記念品」パスワード、つまり思い出について率直に話してくれたことだった。私が頼んだ友達は、その依頼を他の人にも送ってくれた。それからすぐに私の知らない人からパスワードが届いてくるようになった。同房者の識別番号を含めた前科者のパスワード（2度と戻らないと）。聖母マリアを含めた元カトリック教徒の女性のパスワード（「密かに心を落ち着かせてくれる」）。流産してしまった男の子の名前を使った45歳の子供の居ない女性のパスワード（今でも彼を何らかの形で心に残そうとしているのかもしれない）。

中には、遊び心に満ちたパスワードもあった。例えば、“incorrect”「間違い」をパスワードにしたと話した者もいた。忘れた時には「パスワードが“間違っ”ています。パスワードをもう一度入力してください」と自分のパスワードを勝手に促してくれた。

ニューヨークタイムズのサイバーセキュリティレポーターであるニコール・パーロスは、彼女がまだ誰にも話したことの無い奇妙な話をしてくれた。彼女がアカウントをロックされたとき、テクニカルサポートスタッフに「3桁の暗証番号と、侮蔑的な意味を持つ禁止用語からできたパスワード」を伝えたという話だ。その言葉とは、数年前にふと耳にした店員と強盗の面白いやり取りを思い出させるような言葉だ。

しかし、多くの場合こうした打ち明け話には感傷的な要素が含まれている。

ある女性は彼女の姉妹の名前が母親のすべてのパスワードの元になっていることのショックを語った。

また別の話として、ベッキー・フィッツシモンズという女性は、2013年の結婚後も、夫のウィルが昔の彼女の誕生日をデビットカードの暗証番号として使っていたために文句を言

ったことを思い出した。

「嫉妬深い人間ではない」とフィッツシモンズは言った。「しかし、次の日私の誕生日に変えてくれた。」

11歳の息子がジャングルジムを昇るのを見ながら公園で犬の散歩をしている女性と、立ち話をして記念品パスワードのことを尋ねたこともある。

彼女は大抵の人と同様に、あまりにもプライベートな話である上、ハッキングされるおそれもあるので名前を伏せた上で、語ってくれた。息子の自殺から数ヶ月後、机の中から“Lambda1969”という彼のパスワードが書かれた紙が見つかった。インターネットで調べてみたところ、息子は同性愛者だったということが分かった。“Lambda “というのはギリシヤ文字の「I」の小文字で、ある歴史家によると同性愛文化において「解放」の意味を持つ言葉であった。“1969”という数字は、グリニッチビレッジにあるストーンウォールインでの警察の手入れに対する同性愛者の抵抗運動である「ストーンウォールの反乱」の年号を表すと彼女は説明した。

創意工夫にあふれた非常に印象的な記念品パスワードもあった。

バネ式の機械が強い力をため込むように、パスワードは壮大な概念を短い暗号としてきれいに凝縮したものである。

私のランニング仲間であるコートニ・カーは、シェリルサンドバーグが書いた本『LEAN IN(リーン・イン) 女性、仕事、リーダーへの意欲』に影響されたあと“Ww\$\$\$do13”というパスワードを使い始めた。

これは“What would Sheryl Sandberg do”(シェリルサンドバーグだったらどうする)を省略した言葉に、このパスワードを使い始めた年(2013年)を表す“13”を加えたものだという。

言葉遊びが好きなコンピュータ科学者の友達のパスワードは「TnsitTpsif」で、「次の文は真である。前の文は偽である。」の省略であり、哲学において自己言及のパラドックスと呼ばれている。これは、私の友達にとって、言葉が言葉自体を束縛することへの滑稽な言及であった。

テクノロジーの未来をテーマによく本や論文を執筆しているスタンフォード大学のエンジニアリングの教授であるポール・サッフオ氏に、私が「記念品」パスワードを説明したところ、彼は「暗号俳句」という新しい用語を作り出した。

友達の元同居人のレイチェル・マリス（29）は、私がパスワードに注目していることを知り、パスワードをメールで送ってくれた。それは彼女のお父さんの生まれたウクライナの一都市の名前 Odessa(オデッサ)だった。一見印象に残るパスワードとは思えなかったが、深い意味が込められていると彼女が言ったので、お茶をしながら話をすることを提案した。マリスはカフェ・ラテをちびちび飲みながら一時間かけて、このパスワードの力の源泉を説明してくれた。

“Odessa(オデッサ)” というのは血統を示すだけでなく、2008年の父親とのオデッサへの旅にも関連していた。

“オデッサ”は共有することの出来ない言語や過去、共産主義政権の下でおくった青春の記憶を具体化するという意味で、彼女と父親をいつも隔てていた場所だった。

1980年、当時28歳の父親はウクライナから逃亡し、二度と戻らないと決心した。アメリカにさえ、KGB(旧ソ連の国家保安委員会)が誘発した、警察への懐疑論のような古い慣習がいまだに残っていた。

コネチカット州のニューヘブンから程近いトランブルという町で過ごした幼少時代には、家族旅行や家計のような「デリケート」な話をすると父はリビングのブラインドを閉めたとマリスは言った。若い頃“オデッサ”は父の意識のなかで大きな存在となっていた。なぜ壁紙、絵画、食器、カーペットなど家の中のどこにも緑色のものがないのか、母に尋ねたところ、その色は軍隊で過ごした辛い青年時代を父に思い出させるからだと言われた。

オデッサへ帰る旅では、マリスはお父さんの飛行機のチケットを用意し宿泊の手配をした。驚くことに彼女と同じように父親もオデッサの道に迷い込んだ。しかし普段口数の少ない父と母語のウクライナ語で話をするのができた。

祖父の墓参りをした時父は不思議と落ち着いていたが、昔、ある緊迫した夜、父をオデッサから連れだした鉄道の線路を彼女に見せると、父は胸を詰ませた。

何よりも、パソコンへログインするためにオデッサを入力する度に彼女はそのときどき

着いたひとつの答えを思い出す。それは父やオデッサなど何かとの距離を縮めることは、それをより小さくまたはより捉えやすくさせるわけではない。むしろそれのもつ複雑性とニュアンスを強調させるだけだということだ。

マリスがすべてを打ち明けてくれたこの話は、彼女がこの6文字のパスワードに込めた思いの分だけ、たしかに興味深いものだった。私はこの“Odessa”というパスワードが大好きだと伝えた。

しかし個人的な意味を含むパスワードを避けるという大原則があるため、彼女の職場のテクニカルサポートスタッフは私の意見には賛同しないだろう。安全なパスワードの方が覚えにくいからこそ、そのルールを無視して個人的なものにする。人間の脳は新しい記憶を古い記憶に係留する傾向があるからだとマリスは指摘した。

加えて、これは人間の心の奥底に潜む、デカルトが提唱した「我思う、故に我あり」のように人間は物事に意味を吹き込むことが好きで、それを必要とさえしているような気がするのだ。私達人間にはシンボルを言語に置き換える傾向があるという私の考えを伝えた。

マリスは私に興味津々の視線を向けた。

私たちは足かせをアートに変えようとすることによって、自らの環境までもよりよくしようとする。

儂い人生の中で不変のものを求め、例えばパスワードの場合「簡単に使い捨て出来るものにしろ」という指示を無視し、その代わりに特別な思い出をパスワードにこめて守ろうとする。こうした傾向こそが人を人たらしめるものなのだ。

こうした特別なパスワードをつくることは一枚の紙から価値あるものをつくりだす折り紙のように、時に平凡の中から見つけ出す、小さな即興の創造性ある行為なのだ。マリスもこれに賛同したようだった。彼女はうなずき私と握手をして別れた。

知らない人にパスワードに関して質問するのは、とても厄介なことだ。聞きすぎればハッキングされると警戒され、軽く聞けばどれだけパスワードが面倒で嫌いかを語られるだけだろう。それでもこれは、数年来の気心の知れた人の新たな一面に気づかせてくれる、そう滅多にない話題にもなろう。

例えば私は、最近連邦判事を退職した生真面目な父が、実は”The Purple Eater”

や” Monster Mash” のような、1950 年代後半から 1960 年代前半の滑稽でコミカルな歌への秘めた思いから、パスワードを設定していたことを知った。

また、妻がパスワードで用いている 4622 という数字は、彼女の父の子供の頃の住所の一部であるだけでなく、彼のはかなさと強さを思い出させるものでもある。労働者階級の人々が多く住む西タルサで、奨学金を勝ち取った 120kg のフットボール選手であった彼女の父は、幼少期に、自分の家の住所 (4622 South 28th West Avenue) を言う際、一息で歌うように言わないと、吃音が原因でうまく言えなかったらしい。

私の幼い息子は、パスワードが「哲学」であることを明かしてくれた。それは、パスワードを作った数年前、「哲学」という大きな概念の意味を知っていることにひそかに誇りを抱いていたからだという。私にも通じるころがあったので、大変興味深かった。幼少期に私は、「個体発生の系統発生反復」という高校の生物の授業で学ぶような進化論に心を奪われ、それを組み合わせてパスワードを設定したことがあるのだ。(今は時代遅れとなっているこの仮説では、個々の身体的または知的発達の過程は、個々の種や文明の発達過程に似ている、とされる。)

私は、イギリスのサルフォード大学のサイエンスコミュニケーションとデジタルメディア専門の教授であるアンディ・ミア氏に、パスワードについて尋ねたところ、人類学的見解を述べてくれた。「記念品」パスワードを設定することで、普段思い出すことのない個人的な記憶に日常的に触れることが定型化する、と彼は言う。たとえば、机の上の写真立てのようなものよりも頻繁にそして積極的に、そのパスワードと関わる。「パスワードを使うという儀式をしなくなることは、すなわち自分自身との深いかかわりをなくすこと」とミア氏は語る。

こういった儀式は、人によってはやる気を出させるお守りの意味もある。プロのランナーであるフィオナ・モリアーティさんは、5000m の目標タイムである 16:59 をパスワードによく使うと教えてくれた。上海から連絡をくれたデザイナーのモーリシオ・エストレーラさんは、Narrato や 1 Second Everyday のようなお手製の人気アプリが持つ、使い手に野望や価値観について、自然と立ち止まって深く考えさせるような効果を、パスワードももたらず、と説明した。離婚後すぐに前妻への怒りを鎮めるために、エストレーラさんはパスワードを「彼女@許す」に設定しなおしたという。「効き目があった」と彼は話す。会社のパソコンのパスワードは規則上 30 日ごとに変更しなければいけなかったもので、彼はいろん

な目標を立ててパスワードをリセットしているという。例えば、「喫煙を永遠に@許す」(目標達成)、「タイ旅行のために@節約する」(目標達成)、「一日@二食」(「効き目はなく、今も私は太っている」とエストレーラは綴った)、「母と会話する@日曜日」(「効き目があり、今では毎週母親との時間を作っている」と彼は話す)。

記念品パスワードはまた、失ったものやターニングポイントを思い起こさせてくれる。ニューヨークタイムズの記者であり、この記事についてインターネット上のビデオシリーズを作成したレズリー・ディビスさんは、フェイスブックの初期のパスワードを、彼女のいところが発作を起こした日に偶然フェイスブックページを作成したことから、「発作 911」にしたという。私の友人のモニカ・ヴェンディトーリの忘れ形見としてのパスワードは、「もうこれ以上泳がない 2659」だ。これは、2008年に選手生命を絶たれるような肩の損傷をしたことによって、彼女が高校のときに50ヤードのフリースタイルでの選手権大会で26.59秒の記録を残せなかったことに由来する。彼女にとってこのパスワードの持つ意味は年々変化している、と付け加えた。初めは傷を癒すための儀式であったが、今では「時間はすべての痛みを癒す」ことを思い出させてくれている、と話す。

これらの「記念品」パスワードは、多様性があると私はわかった。

高級腕時計とスーツから判断するに成功しているように思えるおしゃべりな男と、私は飛行機で隣り合わせた。私たちは仕事について短く話をし、最終的にパスワードへの関心を彼に伝えた。黙って窓の外をじっくりと見た後彼は私の方を向き、パスワードの中には決まって1060を入れると告げた。彼は、これは自分のSATのスコアだと説明し、このスコアを思い出すことが好きだといった。それは標準検査の上では自分は平凡だと示されたにも関わらず、彼が人生の中でどれだけ遠くから来たかを確認し、いくらかの個人的な満足することができるからだ。

私は、21歳の大学生メーガン・ウェルチからメールを受け取った。彼女は数年前、DVをするボーイフレンドとの関係に捕われ続けていた。彼女は彼が彼女のメールをどれだけ見張っていたかを詳しく話した。

彼女がパスワードを変えようとしたとき、彼はいつもそれを推測するか、新しいパスワードを教えるようにさせた。

「私はとても予想しやすいのだ」彼女はいった。ついに彼と別れると決めたあと、彼女はパスワードに決断をした日付と「自由」という単語を使った。可愛らしい単語からの逸脱



は彼女の規範となった。特徴的でなくなることによって、彼女のパスワードはハッキングされなくなった。それは以前の彼女との決別であり、決別のお祝いでもあるのだ。

「記念品」パスワードはとてもユニバーサルで、今やポップカルチャーの構造の一部である、と私は気付いた。例えばショータイムの「デクスター」で、主人公(日中は警察の血痕の分析者、夜は自警団の連続殺人者)は彼の仕事用コンピューターのパスワードを忘れた。デクスターの暴力的傾向を目撃した後に自殺した、彼の養子関係の父であるハリーの幽霊が木デクスターのもとに現われた。この訪問はデクスターに彼のパスワード(ハリー)を思い出させ、テレビ視聴者には彼の長く深い個人的な苦悩を思い出させた。

グーグルでもう少し例を探すと、私は NBC 連続ホームコメディの 30 ROCK のアレック・ボールドウィンのキャラクターであるジャック・ドナヒーを見つけた。彼女の留守番の暗証番号 5 5 2 8 7 は彼らが高校で一緒にとっていたドイツ語の授業の中でジャックが使っていた名前であるクロスをあらわすことを知った。それにより、彼がまだ高校のときに好きだった女の子が自分のことを好きだと自分に言い聞かせた。

婚約者をうんざりさせ、たとえ誰かの命がかかった場面でも共有することを躊躇した、という『となりのサインフェルド』の登場人物ジョージ・コスタンザの ATM のパスワード「Bosco」(チョコレートシロップのメーカーの名前)はジョージの好物であるチョコレートシロップと関連したものだった。

しかしおそらく、私が見つけた最も奇妙なパスワードは、ジェリー・サインフェルドの ATM のパスワードである Jor-E1 だった。最も単純なレベルでの説明をするならば、それはクリプトン星の執行官であるスーパーマンの父の名前だ。それは番組の登場人物としてのジェリーのコミックブックのキャラクターへの愛着を示すものだ。しかし、もう少し深掘りしていくと、ジェリー本人の父は東ヨーロッパ系ユダヤ人家系で、彼のファーストネームはカルマンだった。これが、この設定ができたずっとあとに生まれたジェリー・サインフェルドの二人の息子のうちの一人が、ミドルネームとして カルをもっている理由だ。ほとんどの人がクラーク・ケントとしてスーパーマンを知っているが、彼のクリプトン星での名前はカルエルだ。ジェリーがパスワードの中に隠したものは、事実と作り話、過去と現在、コミックブック、テレビドラマと本物の人生の間で輪をつくりだしている。

※となりのサインフェルドの登場人物ジェリー・サインフェルドを演じるのはジェリー・サインフェルドという名前の俳優である。

私は、それをもう一度言おうとしてもついていくのが精一杯なほどに複雑な話である、サインフェルドのパスワードのエピソードが大好きだ。エッシャーの幻視を初めてみたときに人々が感じるように、その循環性は私の中の畏怖感を刺激する。1979年に発行されたダグラス・R・ホフスタッターの傑作である『グーデル、エッシャー、バウハ -不思議の環-』で述べられた複雑で自己言及に満ちたパターンを私に思い起こさせた。

その本は、言語や私たちの周りにある無生の物質から生まれた自己感覚をどのように作り出すかということへの、美しく個人的な沈思なのだ。

私が「記念品」パスワードの中に見たことと、ホフスタッターの本の中で書かれた音楽や数学や芸術の中にある手の込んだ循環性との間にはパラレルがあるのかもしれない。人間心理のフラクタルのように、おそらく私たちはただ「記念品」パスワードをつくりだすだけでなく、記念品パスワードの中に自己言及の循環をつくりだす傾向をもっているのだろう。

そこで、これについて尋ねるためにわたしはホフスタッターに電話をかけた。彼は内気だったが興味をそそられていた。私は、これらのパスワードの多くは私たちが抱える親愛なことへの静かな儀式のように思えると提案してみた。ホフスタッターは同意した。彼の主なパスワードは彼がスタンフォードで客員教授であった1975年から使っているものと同じだった。それは文章題と彼の過去の感傷的な日付からなるものだった。

「これらのパスワードの習慣とあなたが研究した自己言及の循環のなかにはより深い何かがあるのでしょうか。」

わたしはたずねた。

これらのパターンのいくつかは私たちが発見し、その他は私たちがつくりだした。しかし、とりわけ「私たちはランダム性に反対する」のだ。「記念品」パスワードはこの一部だ。ホフスタッターは言った。

インターネットは告白の場だ。プライバシーがどんどんなくなっていく時代の中で、パスワードは近いうちに8トラックプレイヤーのように面白おかしく、懐かしく孫たちに説明するようなものになるだろう。

10年前、ビル・ゲイツはサンフランシスコでのテックセキュリティ会議の中で言った。人々はこれからだんだんとパスワードに頼らなくなっていく。なぜなら、パスワード

は重要な情報の安全を守るという課題を満たさないからだ。ここ10年の間に、機械がパスワードを使うことなく、トークンやキーカードあるいは目や声や指紋をスキャンしたりするように、私たちが持ち合わせているもので私たちが判別できるようになってきた。例えば、今年にはグーグルはスリックログインを指紋スキャナーとともに買収し、音波を使ったIDの実証をはじめた。iPhoneは一年以上まえから指紋スキャナーを搭載した。しかし、未だにパスワードは激増し、転移し続けている。毎日、サーモスタット、車のコンソール、ホームアラームシステムなどのより多くのものがインターネットとつながり、そしてパスワードによって守られている。ビッグデータはビッグマネーであるから、いまでは無料のウェブサイトできえ、あなたの重要な情報を得るために登録させるのだ。そして、企業は潜在的な顧客を追うことができる。5年前には、人々は平均で21のパスワードをもっていった。パスワードストレージを作る企業であるラストパスによると、いまではその数は81になったということだ。

こうした新しい技術の開発はますます大きくなり共有されたパスワードへの嫌悪に刺激されてのことだ。デジタル化の時代は私たちが圧倒している。弱まることのない情報の洪水である。不断のトラブルシューティングだ。私たちがひとつのデバイスをマスターするたびにまた新たなものが登場する。こうした欲求不満はパスワードを忘れることのかんしゃくにつながるのだ。

パスワードを忘れたとき、自分に関する答えることのできない情報を質問されることほど、現代社会的アノミー（社会的価値観の崩壊による混沌）へ落ち込むことを感じさせることはないだろう。毎週のように深刻なセキュリティ侵害に関する一連の情報をみれば、インターネット上のプライバシーを手に入れることは不可能だと感じずにいられない。

これはパスワードに異議を唱える人びとがまともであるという十分な根拠となる。こうした人々が、オンラインセキュリティを理解することを諦めたり、代わりに意図的に十分に安全とは言えないパスワードを採用することをきめたりした、私がインタビューしたたくさんの人たちである。

いわゆるデジタル・ヌーディストとはすべての思慮分別を捨て去り、ハッカーや個人情報の窃盗者に対して無防備でいるようにするひとびとのことだ。彼らは大衆の中で消えるという希望的考えによってのみ守られている。デジタル・ヌーディストになるという彼らの反抗のための控えめな行動が示唆するのは、私に記念品パスワードをすすんで教えてくれ

た理由が、オンラインセキュリティを絶えず監視する必要があることに対して誰もが感じている窮屈さからの小さく個人的なカタルシスを得るためではないかということだ。

2009年12月、とある東欧のハッカーが攻撃しやすい標的を求め、インターネットを点々としていると、偶然その宝庫に出くわした。それは、オンラインゲームのネットワークを動かしている「ロック・ユー」という会社にログインするための3200万ものパスワードのデータベースであった。それから数週間後、そのハッカーは、データベースをインターネット上で公表した。そしてそれは今でも過去に公開されたアーカイブの中でも、膨大な情報をもつものである。

その中にはデジタル・ヌーディストが頻繁に見られた。少なくとも10人のユーザーごとに、1人は自分のパスワードに名前あるいは名前に年を加えたものを選ぶ。2000中2つは「パスワード」という言葉であった。ロック・ユーの欠陥からは、より大きな教訓を見いだすことができる。ほとんどのパスワードにおける研究、心理学、あるいは人類学よりも、安全性に重きが置かれているのだ。しかしながら、現代的な活動においては、パスワードを作成すること以上に普遍的な行為はないだろう。裕福な人も、貧しい人も、若い人も、私たちは毎日のように電信送金、プリペイド携帯、ネットバンキング、Eメール、国際テレホンカードなど、登録を必要とする科学技術にあふれている事態に直面しているのだ。「ロック・ユー」データベースの教訓は、如何にして言葉が存在感、そして個人的な重みを増したものになるかを示すだろう。

これが、ここ数年、オンタリオ工科大学のコンピュータ科学者の小さなチームが字句パターンを抽出するためにロック・ユーを研究してきた一つの理由である。彼らの発見の中で、より興味深いものとして、以下のようなものが挙げられる。“Love”はパスワードの中で群を抜いて最もありふれた動詞だった。それは“to be”という動詞の活用形のおよそ2倍、“to hate”という動詞の活用形のおよそ12倍頻繁に使われていた。圧倒的に人気のある形容詞は、“sexy”、“hot”、“pink”であった。男性の名前は、女性の名前の4倍“I love”で始まるパスワードの対象として現れる。

グループの重要な研究者の1人であるクリストファー・コリンズは、愛情さえも仮面を被った形で現れる、と説明した。例えば、一見“team”という言葉が過剰に使用されているように思われたが、実際はスペイン語の言葉の“te amo”すなわち“I love you”であることが分かった、とコリンズは言った。また、“14344”という数字は異常に現れ、研究者た

ちは初めは、それが日付について言及していると考えた。1944年3月14日のことを言っているのだ。スラング辞典『アーバン・ディクショナリー』を調べると、彼らはすぐにその数字が実際には“I love you very much”という人気のある暗号であるということが分かった(それぞれの単語の文字数を数えてみよう)。

私自身の対談では、私も愛(家族愛、報われない愛、プラトニックラブ、あるいは失恋)が「記念品」を形作る共通の源となっていることに気がついた。ひょつするとわたしのお気に入りの逸話は1993年、当時22歳であるマリア・T・アレンが作ったパスワードだ。それは、彼女が夏にときめいたJDという人物の名前、秋の月と彼らが初めて出会ったときに彼が彼女をたとえた神話上の女神の名前(生憎彼女はどれであるかを教えてくれなかったが)を組み合わせて作ったのだ。情事を終え、彼らは別々の道を歩んだ。しかし、パスワードはそれに耐えたのだ。11年後、突然、アレンはClassmates.comを通じてJD本人からメッセージを受信した。そして、彼らは、数年間付き合い、結婚することを決めたのだった。結婚式の前、JDは、彼女がこの十年間、自分のことを考えたことがあるかとマリアに尋ねた。「自分のYahooアカウントにログインするたびにほぼ毎回」彼女は彼に、パスワードの秘密を詳しく話す前に応えた。彼は結婚指輪の内側にそのパスワードを刻み込んだのだ。

しかし、パスワードは人間の暗い面をはらみうることも確かだ。ロック・ユーのアーカイブ研究の初期メンバーの1人、ジョセフ・ボヌー(30)は、何万もの人々が“killmeplease”「私を殺して」「myfamilyhatesme」「家族から嫌われている」、 “erinisaslut”「エリンはビッチだ」のようなメッセージ-たくさんの卑猥な言葉や人種的な中傷は言うまでもなく-を彼らの生活に1日に何度も導入することにしようとしたことに驚いた、と言った。

そのデータベースを研究する際、ボヌーの焦点はパスワードの意味ではなく、パスワードの安全性にあった。そして彼は、安全性について掘り下げれば掘り下げるほど、プライバシーのゆくえについて心配するようになってきたと彼は言った。なぜなら、現代人は人生の多くをネット上に委ねているからである。「ロックユーの事件が明らかにしたことは、データセキュリティに関しては、人間が本当に弱連結であるということでした」彼は指摘した。

しかしパスワードに欠陥をつくるものこそが、ボヌーを高揚させるものでもある。「人々はパスワードを覚えるというような自分たちに課された自然でない要求を引き受け、それ

を意味のある人間経験にするのだ」と彼は言った。

その後私は、ボヌーの言葉をコリンズに詳しく話したところ、賛成を得られた。「私たちはパスワードを作ることを単なる意味ある経験にしないのだ」と彼は言った。「統計的に言えば、それはほとんどの場合、愛情経験である」

人々の「記念品」を集めることにはそれを傷つけてしまう可能性がある。何かを観測しようとするならば干渉してしまうことになる。しかしパスワードあるいは他の秘密の場合、私たちはそれを口にするだけで台無しにしてしまう。実際、私にパスワードを明らかにした人々は皆、それを使うことをやめるつもりだと言った。だが、それにもかかわらず彼らはそれを教えてくれた。

カリフォルニア州立大学の情報管理システムの教授、そしてインターネットエンサイクロペディアの編集者であるフセイン・ビッドゴルディ氏は、30分にわたってパスワードに個人情報を使うことの危険性について私に話した。しかし、「記念品」をパスワードにすることについて尋ねると、彼は黙りこんだ。

そして、ビッドゴルディ氏は彼の人生について話し始めた。彼はテヘランの近くの小さな町で育ち、1976年に博士研究のためにイランを去るまでずっとそこで過ごしたと言った。彼はカルクハネという高校のことや、両親とよくピクニックにいった近所の大農場のバラやツツジのことを話した。

エンジニアである父は、働いていたオリーブ加工工場からよく家に持ち帰ってきた。新鮮で作りたてのオリーブオイル特有の味を、彼は思い出した。

「それなら、私の記念品パスワードはカルクハネだ」とビッドゴルディ氏は言った。

カルクハネは、ペルシア語で「人々が働く場所」を意味すると彼は言った。しかし彼にとってのはかつての幸せと両親と過ごした時間、彼の労働倫理と民族アイデンティティを形作ったその場所を呼び起こした。

「それは素敵な思い出だ」と彼は小声で言った。

なぜそれほどまでにセキュリティについて心配している人が、私にパスワードを教えよう

とするのだろうか。私は、それはもしかするとインターネットが生み出したプライベートな情報の過度な共有の文化の拡大なのかもしれないと思った。パスワードの意味を掘り下げようとする私の試みと、その試みに人々が熱心に協力してくれたことは、パスワードの中から私が実際に見つけ出した特定の意味以上のことを物語っている。パズルを解くのは人間だけではない。しかし人間はそれを解くためにパズルを作り出す唯一の存在である。

ビッドゴルディ氏は、パスワードをなぜ明かしたのか自分でもよくわからないと言った。そして長い沈黙の後にこう付け加えた。

「ただあなたの記念品という考えには真実味がある。私はそれに貢献したかった。」